

進展する米中関係

米台関係で合意か

つい最近まで、「緊張緩和」が合言葉であつたような世界の情勢は、このところ急速なテンポで旋回しはじめており、その行く末にはいさか無気味なものさえ漂つてゐるようにも思われる。中東戦争、ソ連による対中予防戦争必至説、アジア各国の政情不安などの要因がエネルギー危機、食糧危機の問題と重なりあって、「当面の国際情勢の特徴は天下大いに乱れることにある」という中国の公式の情勢認識があたかも妥当するかの観さえしないでもない。

そしてキッシンジャー長官は、その宴会のスピーチで、「たとえどんなことが起ころうとも、どんな政権が登場しようとも、米中友好は不变である」旨を述べて、ウォーターゲート事件の余波で揺らぐニクソン政権の将来を予言するかのような大胆不敵な言葉さえ吐いたのであった。

長時間の毛・キッシンジャー会談

そのような折しも、さる十一月十日から五日間、キッシンジャー米国務長官は六度目の、そして國務長官としては最初の中国訪問を果たし、毛沢東、周恩来両首脳と会談して共同コミュニケを発表した。とりわけ、今回の毛沢東主席との会談はこの二ヵ

年間の外国首脳との会談ではもつとも長時間のものだったという。毛主席の非共産圏首脳との会談では史上最長のものだったといふ説さえある。

中東戦争から石油危機にいたるプロセスで、ソ連の老練な手口におののいたかにみえるキッシンジャー長官は、このところイスラエルの執拗な態度にも手を焼いていたようと思われる。一方、不遜にもニクソン大統領に對しては「お守りに飽きた」観さえ見られるのである。それだけに、毛沢東、周恩来両首脳との今回の会談にはきわめて大きな期待をもつていたのではないか。米中間の合意には、コミュニケの文面以上のものがあつたというキッシンジャー長官自身の談話もこのことを暗示している。

米中正常化へ前進

一方、中国の側、とくに周恩来総理としては、米中接近以来の周恩来路線への内部的な抵抗に対し「見せしめる」ためにも、毛沢東・キッシンジャー会談と米中の合意は必要であったように思われる。こうして今回の米中会談ではきわめて広範囲な世界情勢が討議された模様であり、そのような

ともかく、揺らぐニクソン政権において、一人キッシンジャー長官だけは意氣軒昂である。

会談と米中の合意によって、米中間の未解決の難問であった台湾問題は、もはや当面の最大のイシューではなくなりつつあるといえよう。この方向は、キッシンジャーが『ニューヨーク・タイムズ』のサルツバーガー記者に語った談話にも表れていた。

すなわち、米中間のかたちのうえでの完全な正常化のためには現状の米台関係が、

「基本的な妨げ」になつてゐるのだが、しかしそれはもはや「唯一の」障害ではあり得ないことを示唆したのであつた。そしてこの点が今回の米中コミュニケでは、「中米両国関係の正常化は一つの中国の原則を確認する基礎のうえに立つて」実現される旨、共同声明文の中国側主張の部分に『原則の確認』という文句がはじめて採用されたことによつてさらに明白になつた。

こうして、米中双方とも、台湾問題では当面、ド拉斯チックな政策変更をせずに、米中関係の形式ではなくより実態的な正常化を実現することに合意したのであり、最近の国際情勢の展開と米中双方の内政上の要請は、このことをさし迫つて要求として

いたのであつて、台湾の現状維持には、ますます明白な方向性が与えられたといえよう。要するに米中双方とも、台湾の地位をこれ以上大きく変更したり、台湾をこれ以上出口のない状況に追いやつたりする必要がないばかりか、そのような台湾政策を実際に移す余裕も現実的不可能もないのです。

米中の内政

ささらに現実的に発展させつつあるといえるのである。

キッシンジャー訪中と前後して、アメリカが台湾駐留米軍を三〇〇〇人引き揚げ、さらに本年中に残留米軍の三分の一を引き揚げることになったのも、こうした米中間の積み上げ方式の一環であつて、それ以上のものだとは思われない。

ともかく、キッシンジャー長官の今回の訪中は、ある意味では、ニクソン大統領訪連共産党書記長のインド訪問や、さる七月のアフガニスタンにおける親ソ政権の誕生、さる五月のソ連艦隊の台湾海峡航行をはじめ、過般の日ソ交渉においてもソ連が強く要求した「ブレジネフ・ドクトリン」の忍び寄る影をまえにし、こうしたアジア全地域に広がるソ連の軍事的・外交的プレゼンスに加えて中ソ国境の軍事的緊張を考慮すれば、おのずと米中間の合意の内容も推察し得るのである。このような広い枠組のなかで、台湾問題はいまや米中間の一つの小さなイシューへと転化したのであり、この点で米中双方は、上海コミュニケの精神を